

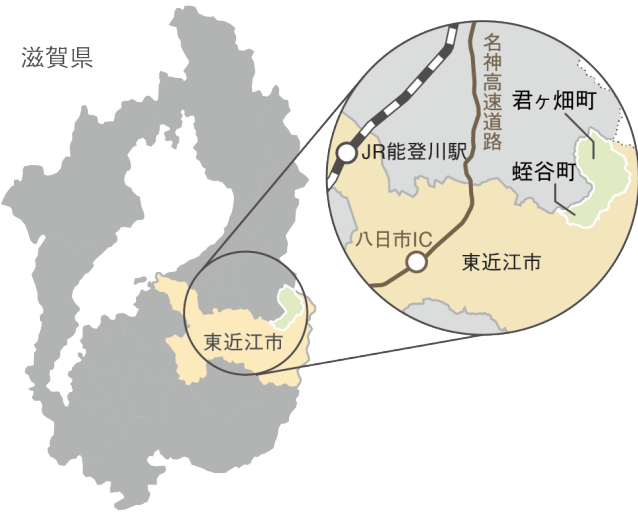
一、木地師の総合センター小椋谷

(一) 木地師のふるさと

東近江市奥永源寺地区は鈴鹿山地の西麓に位置し、小椋庄、小椋谷、小椋六か畑(九居瀬、黄和田、政所、箕川、蛭谷、君ヶ畑)などとよばれています。また、茨川地区を加えて小椋七か畑ともいわれました。このうち君ヶ畑と蛭谷は、木地師に関わる文書類、版木類、木地挽用具類、木地製品などの資料を数多く残しています。

また、君ヶ畑には大皇器地祖神社、金竜寺(高松御所)、伝惟喬親王墓、蛭谷には帰雲庵、筒井八幡宮、筒井公文所、そして筒井峠には惟喬親王御陵、筒井千軒町跡といった史跡があり、地域の人々の手によって手厚く守られてきました。

木地師のふるさとの位置図



蛭谷町の景観



君ヶ畑町 大皇器地祖神社



木地師はろくろを携えて日本各地の山に入り、良木を選んで漆器の素地になる丸膳、椀類、盆類など丸物と呼ばれる木地、またこけしを代表とする木地玩具や飯杓子、汁杓子などの日常生活用品を製作してきた工人の集団です。その木地師の末裔は今日も各地で活躍しています。各地に出かけ木地師にお会いした際に「あなたの故郷はどこですか」と尋ねると、その多くは「近江です」「近江の小椋谷です」という答えが返ってきます。木地師の間には、自らの故郷が近江であることを心の支えにし、また誇りにしていることを強く感じます。各地の木地師がこのような想いを寄せていることは、小椋谷が全国の木地師の重要な中心拠点(センター)として、長い歴史を刻んできたことと関係が深いことが考えられます。東近江市で收藏している木地資料の多くは、このような人々が製作したものです。

(一) 会津地方の木地師と近江

近世という時代の開始時期については専門家の間で議論がされているようですが、大名領国制が敷かれる時代に入ると領国内に城下町が形成されていきます。領国の運営を担った各大名は経済的自立のために産業化を目指し、その事業として漆器産業を積極的に導入しました。また交通、交易の要所や信仰の拠点に形成された町においても同様で、その理由は日本人の食生活に欠かすことができない食器が漆器であったからでした。

漆器産地の成り立ちを追っていくと、慶長期(一五九六～一六一五年)から元禄期(一六八八～一七〇四年)にかけての約百年間に三三箇所の産地が形成されています(沢口一九六六)。この中には古くからの産地として成立しており、江戸時代に入ってからに産業基盤を固めた会津漆器などの産地も少なくありません。

全国の漆器産地を概観すると、秀衡(岩手県)、衣川塗(宮城県)、日野(滋賀県)、竹田(兵庫県)、大内(山口県)など古典的な漆器を含めると、明治期に至るまでに七〇箇所ほどの産地(かつて産地であったとされる地域を含む)を見出すことができます。漆器産地の形成に伴い、漆器の木胎として使われる木地を製作する木地師、漆を採取する漆掻き、そして塗師の集団が活躍する場が増加していったことが推測できます。

木地師の動向について比較的古い記録を残し、調査が進んでいる会津地方を例にとり、会津に定着した木地師の集団がなぜ近江地方、とりわけ小椋谷を故郷として親しみを感ずき、誇りもっているのかその一部を探ってみました。

(三) 『新編会津風土記』より

会津漆器産業の大きな流れとして藩主の国替えと大きく関わっていました。近江日野を本拠にしていた蒲生氏郷が会津に入封したのが天正一八(一五九〇)年で、このとき近江から木地師と塗師を伴っていたという記録があります。『新編会津風土記』には次のような記事をみることが

できます。

「会津もと木地師少なりしを近江国慈教寺の勤により君ヶ畑より、木地頭佐藤和泉同新助と木地挽五人とその外慈教寺の三男了性を連れり。了性を府下木戸千軒道本妙寺の住職とし、木地挽は府下七日町に屋敷地を興えおき会津郡慶山村にて始めて木地をひき、夫れより處々に移り享保三(一七一八)年松原村小野川より此處にうつる。(中略)常に山林に就いて小屋をかけ良木儘れば侘山に遷り住處を定めす其の居を遷すを飛と称す」

また、『新編会津風土記』には次のような記事もみられます。

「日野より愛知郡畠村から洪地首吉川和泉守ほか四六人を若松、小荒井村(現喜多方市)に分住せしめた。文禄元(一五九二)年には地方の子弟に製法を伝習させるため若松の大町に間口六間、奥行き一五間の二階建てを建築した。木地挽も同時に近江国慈教寺の勧めにより木地頭佐瀬和泉守、同新助と木地挽五人を移住させ、耶麻郡慶山村において木地を挽かせた(庄司、松木一九六〇)。

このほかに近江からは二百戸の木地師と、日野からは塗師も移ってきたと記録されています。これら事例の信憑性については慎重に検証することが必要ですが、上記の例は会津地方においては一部の事例に過ぎません。いかに会津地方の木地師と東近江の小椋谷、そして日野地方は深い絆を保っていたことはうかがい知ることができます。

(四) 明治以降の木地師の動き

君ヶ畑と蛭谷には『氏子狩帳』『氏子駆帳』と呼ばれる記録が残され、大切に保管されています。この記録によって近世という時代を通して全国各地で活動してきた木地師の足跡をうかがい知ることができます。木地師に限らず当時の職人は原材料がある所で仕事をしたので、材料がなくなると移動することが常でした。その移動の全体像を知ることができる唯一の職人集団が木地師でした。

ところが、明治時代を迎えると氏子かりの制度は廃止され、その上、木地師の活動が難しい状況に陥りました。その要因はいくつかありましたが、第一の要因は、食器の主流が漆器から磁器に代わったことでした。

明治以降、鉄道が全国各地に張り巡らされると、漆器よりも安価で真つ白な磁器の茶碗が全国各地に運ばれて行きました。鉄道普及以前、茶碗は船で運ばれていたのが港の近辺には出回っていましたが、それが鉄道によつて全国的に広がっていったのです。

第二の要因は、木地師が入つていった山の所有権が確定され、原木の確保が難しくなったことでした。

三点目は、水力や電力を活用した動力ろくろの出現です。ろくろの回転数が強力がつ速度が早くなり、木地の荒型から仕上げまで一気に製作できるようになりました。木地師が山に入って荒型を取る必要がなくなったのです。四点目は初等教育の普及があげられます。明治以降、教育が普及していくなかで、木地師の人々も子弟を学校に通わせることに熱心であつたので、山を下りる決心をしたのだと考えられます。

さらに戦後の経済成長期を迎えて、工場で大量に生産された日常雑器が急速に普及していったことも大きな要因です。安価で手軽な日常雑器が身近なものになって、特殊な技術を必要とし、多くの作業工程を経て作られる日常用漆器の需要が減り続け、一般家庭の冠婚葬祭や旅館業者の必需品として使用されるにとどまり、漆器と木地は減産の一途をたどっていききました。

(五) 近代化を支えた挽物師

一方、ろくろを使用して江戸(東京)、京都、大坂などの町場で木地を挽いていた挽物師と呼ばれた人々がいました。挽物師は、居職といつ町に定住して仕事をした人が多く、原木の供給体制が整つた町場では居職が可能でした。山を移住する必要がなかつた挽物師は、多様な工具を駆使して繊細な挽物を製作することが得意でした。

明治時代以降、挽物師は近代化に見事に対応していきます。この時代、海外から新しい知識や商品が導入され製造業を大きく変えていきました。その一例が万年筆でした。江戸時代まで使用されていた筆記具は、毛筆、墨、硯でしたが、海外からは便利な筆記具として万年筆が導入されました。万年筆は基本的にペン先、軸、インクの導出部品によつて構成されています。

明治時代、万年筆は輸入に頼つていましたが、大正時代に入ると国産化が始まり、初期の段階では各部品は分業によつて生産されました。そのうち軸の部分がペン先やインクの導出部品よりも先行して製作が進んだといわれています。万年筆の軸は横軸のろくろによつて製作されたものであり、挽物師の伝統的技術がいかされたからでした。

君ヶ畑と蛭谷の神社の拝殿には多くの奉納額が掲げられています。その中に「プチナ万年筆本舗中屋製作所(昭和一四年)」、「東京轆轤挽物祖神奉賛会(昭和一五年)」という額にはパイロット万年筆株式会社、東京万年筆技巧親睦会などが記されています。

蛭谷筒井神社には「東京都金属加工挽物協同組合(昭和五〇年)」の奉納額が見られます。旋盤を使って金属加工をした事業所の組合で、組合名簿をみると事務員、技術員、職工、見習工、家族従業者、その他従業者を合計すると男性七五五九名、女性五八一一名を数えます。

扱っている製品は軍需品、無線有線通信機械器具部品、自動車部品、光学機械器具、精密機械器具部品、医療器部品、精密螺子、ナット、一般輸出品及び部品、一般付属品などと記されています。多様な製品や部品を扱っていたことが分かります。

この組合は金属旋盤技術を得意とした今日の町工場につながる小企業の組合でした。挽物師の技術を基礎技術として、日本における機械工業の近代化を縁の下で支えてきた貴重な存在であつたことが分かります。

江戸・大坂・京都の挽物師は山の木地師と同様氏子駈を受けていたことから、君ヶ畑と蛭谷との関係を長い間保つてきたことが分かります。また、急速に近代化していった万年筆のメーカーや金属加工挽物協同組合の間にも、惟喬親王に対する信仰が継承されていたことが分かります。